

商店建築 9

2013 Vol.58 No.09
SHOTENKENCHIKU

平成25年9月1日発行 毎月1回1日発行
昭和31年9月12日 第3種郵便物認可
第58巻第9号 通巻729号

LIFESTYLE STORE研究 マークイズ みなとみらい／カジュアルレストラン／透明素材



New Shop

CAMPER New York

Feature Article

Casual Restaurant



2004年、アクリル加工メーカーとして寺田俊介氏が創業。デザイナーとのコラボレーション、メーカー品のOEM、オリジナル製品の開発を3本の柱とした活動を続けている。写真は代表の寺田俊介氏(右)と鈴木拓郎氏(左)

有限会社 AIR FRAME

MANUFACTURER REPORT 03

アクリル加工職人の手技が、 ハイテックな立体造形を生み出す

静岡県浜松市に拠点を構える「エアフレーム」はアクリル加工の職人集団である。さまざまなデザイナーとの協働でオリジナル性の高いアクリル表現を実現する彼らに、アクリル加工の可能性について聞いた。

取材・文・撮影／塩野哲也(撮影、特記除く)

AIR FRAME (エアフレーム) は10年程前に、静岡県浜松市で創業したアクリル加工メーカーである。立体造形を得意とし、デザイナーとのコラボレーション、家具メーカーなどのOEM、オリジナル製品の3本立てで制作を行っている。同社の持ち味は、1点ごとに作り上げていく質の高い職人技である。それをよく示すのが、今年1月のパリ「メゾン・エ・オブジェ」にも出展された「大トロフィー展」の作品だろう。クリエイター5人にデザインを依頼したアクリル製のトロフィーは、2010年、酒井真貴子氏(サカイデザインアソシエイツ)のディレクションによりリビングモチーフ(東京・六本木)で初披露されたものだ。「大トロフィー展は、プロダクトやグラフィック、ファッション、アートといったジャンルでクロスオーバーに活躍する5人にデザインを依頼し、5作品とも今までにない製作技術を開発することとなりました」と同社代表の寺田俊介氏。作品の制作には大変な時間と手間を費やしたが、同社にとって技術躍進のきっかけとなった。「例えばミントデザインズの作品は、彼らのファッションのモチーフであるジグザグ模様を、さまざまな色を使って表現しました。ジグザグのパターンを形にするため、まずは薄いパネルをモザイク状に貼り合わせ、さらにそのパーツを角柱の4面に貼

るというテクニックが生まれました」(寺田氏)。角柱を上から覗くと、模様が複雑に屈折してカレイドスコープのように煌めいていた。メゾン・エ・オブジェでは、アクリル素材に対する日欧の認識の違いを感じたという。ヨーロッパにはアクリルで緻密な製品をつくる習慣はなく、工芸品のような立体造形は日本独自の技術と言えるだろう。パリで評価が高かったのは、e.m. (イー・エム) によるシャンパングラスをモチーフにした作品だった。「これはアクリルの“封入”という技法を使い、ガラスのまわりにアクリル樹脂を流し込んだもので、グラスの中に水と金ラメを閉じ込めてから封入しています」(寺田氏)。この展覧会をきっかけにトロフィーの依頼が増え、東京ビッグサイトで開催される「インテリアライフスタイル」の受賞トロフィーの制作も手掛けているそうだ。寺田氏と共に加工を手掛ける鈴木拓郎氏に、デザインを形にする上で心掛けていることを聞いた。「デザイナーと打ち合わせをしながら、デザインのどの部分を尊重するかを常に考えられています。アクリルは断面(小口)の美しい数少ない材料で、角度によってミラー効果を生じます。これを生かした光の反射・屈折効果などについてはつくってみないと分からない点も多く、必ず試作品を制作して事前に確認

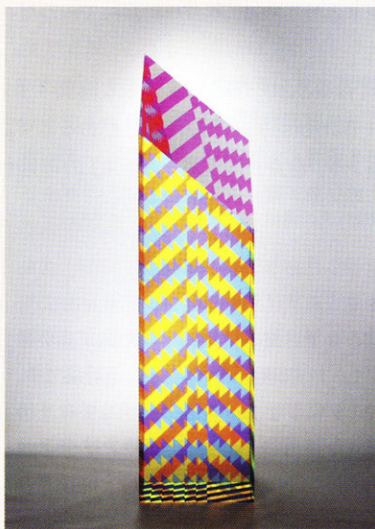
してもらっています。最初のプランからズレた所があっても、試作品の方が面白いと採用されるケースも多いです」(鈴木氏)。部分的なサンプルをつくるうちに新しいアイデアを見つけ、それをデザイナーにフィードバックすることも多いようだ。職人の手とデザイナーの発想のコラボレーションともいえる。さて、冷たくハイテックな印象の強いアクリルに、ナチュラルな雰囲気を持たせようと開発されたのが「クリアウッド」である。透明アクリルパネルの表面を溶かしてから木の表情を彫刻した樹脂型に押し付けたもので、型板ガラスのようなフロスト状の模様が型押しされる。デザイナーの伊藤義隆氏(TAKT PROJECT)は、バー「comorebi」(2007年10月号)のカウンター天板にこのパネルを採用した。カウンターを光らせるため、伊藤氏は小口からLEDライン照明の光を当てることで、パネル全体をぼんやりと面発光させることに成功した。裏側から光で照らすよりも光が柔らかくなり、施工もシンプルになる。イメージを共有し、効果的な開発を進めるためだけでなく、コストをコントロールするためにも、出来るだけ企画段階から参加させて欲しいと鈴木氏。デザイナーの意図を生かしながら、コストに見合った提案をすることも可能だと言う。



1



2



3



5



6

1.「大トロフィー展」の作品を商品ベースにしたミニトロフィー。右端はアクリルには珍しいトメ加工で組み立てたケース 2,3.大トロフィー展の作品は、高さ約1mの大きさがある。e.m.の作品(写真2)はガラスとアクリル、水の屈折率の違いにより不思議な像が浮かび上がる。ミントデザインの作品(写真3)はごくシンプルな形でありながら、ジグザグ模様が屈折し複雑な造形に見える(撮影/姫野清司)



4

4.作業中の寺田氏。アクリルケースのエッジをバーナーで加熱し、接着面や断面を滑らかにしている。アクリル加工職人となったきっかけは「内装材の中でも、加工が一番難しい材料に挑戦したかったから」という 5.インテリア ライフスタイルのトロフィーは、アクリルのブロックの間に蛍光色のアクリル板を挟み込んだ。断面のミラー効果により前面に色が浮かび上がって見える 6.伊藤義隆氏デザインのバー「comorebi」のカウンターは、小口からLEDライン照明を当てることで、「クリアウッド」の木目柄に導光板の機能を与えている(撮影/阿野太一) 7.ミニトロフィーをバフで磨く鈴木さん。アクリルの大敵である、キズ、指紋、ホコリに注意しながら作業を進める。少数精鋭でありながら、nendo がデザインしたブックシェルフ「scatter shelf」を30本以上制作するなど、生産能力も高い



7